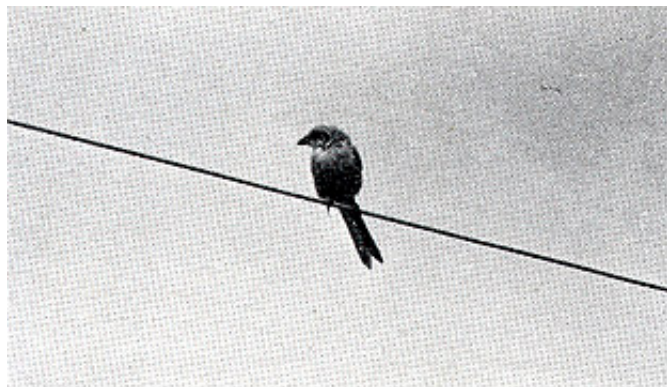




4 . 物真似



電線で休んでいるモズの幼鳥

[モズ](#)にはもう一つの面白い習性がある。それは他の鳥や動物の鳴き声を真似ることである。[モズ](#)は漢字で「鴟」と書くが、「百舌鳥」がよく用いられる。百の舌を持つ、すなわちいろんな物真似のできる舌を幾通りも持っているという意味らしい。

[モズ](#)本来の声は秋の高鳴きにみるように「キィーキィキィキィ」、「キチキチキチキチ」、「チュン」などの特有の音声を持つ。繁殖の季節では「ギチギチギチ」の鳴き声がよく聞かれるが、音声は同じである。

秋のおだやかな日、梢で高鳴きをした後、複雑なぐぜり鳴きをすることがよくある。文字にはあらわしにくい、いろんな歌が出るが、すぐ[モズ](#)特有の地声が出るので、しばらく聞いていると声の主がわかる。よく注意していると、その中にいろんな小鳥の声が現われる。カケスにも似た習性があるが、物真似の対象が[モズ](#)とはちがう傾向を持っている。カケスの場合、自分の恐れる天敵の声が多いが、[モズ](#)は自分より弱い小鳥の真似が多い。俗説では、小鳥を呼びよせて捕えるためだという。実際[モズ](#)は近くに現われた小鳥を襲撃することは多い。だが、[モズ](#)の物真似にさそわれて近よって行く小鳥は見たことがないし、たとえ近づく小鳥があっても、囿に近づく小鳥はまわりに十分注意をはらっているものであり、声の主が[モズ](#)であることをいち早く知るであろうし、微妙な音色の違いに早くから気づいていると思われる。むしろ静かに繁みにかくれて待つ方が、うっかりした小鳥が真近にくる可能性が多い。

私が聞いた物真似で最も多いのが[オオヨシキリ](#)である。[オオヨシキリ](#)は真夏には鳴き止んで、秋風とともに南を目指し渡る鳥である。[モズ](#)が西神戸の農村に多くなる頃には、[オオヨシキリ](#)はもう渡り去った後である。最近、西神戸には[オオヨシキリ](#)はほとんど姿を見せなくなったから、この真似をするのは、どこか[オオヨシキリ](#)の多い地方で生まれ育った[モズ](#)であろう。[オオヨシキリ](#)の声は特異なしわがれ声で、[モズ](#)の能力からすれば5~6回も聞けば覚えてしまうというのなら、神戸生まれの[モズ](#)にもまだそのまねを行なう可能性はあるが、[モズ](#)にそこまでの才能があるとは思えない。また、直接[オオヨシキリ](#)を聞かなくてもそれを真似る親鳥を見習ったということも考えられるが、西神戸の[オオヨシキリ](#)が、少なくなってから、10年以上はたっているので可能性もうすれる。[モズ](#)が[オオヨシキリ](#)をこなすには、幼鳥期に毎日聞かされて、やっとできるようになる程度と想像される。もしこの推定が正しいとすれば、[モズ](#)の物真似も移動に関する一資料として役立つ事になるかも知れない。

次によく出る声は、[ヒヨドリ](#)、[カワラヒワ](#)、[ウグイス](#)（谷渡りと呼ばれている鳴き方）、ホオジロかそれに近い類、[ヒバリ](#)、[チドリ類](#)と思われる声、まれに[ケリ](#)らしい声、[カイツブリ](#)などである。その多くは自分より弱そうな相手であるが、最後の2種は[モズ](#)がいかに猛禽ぶりを発揮しても勝負にならない大きい相手である。

[モズ](#)が物真似を最もよくする季節は、高鳴きの多い秋で、それも穏やかな晴天の日に多い。繁殖中の親鳥や、真夏の[モズ](#)はほとんど物真似はしない。

